

ジャガイモと映画 (35)

<栽培 (2)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさま かずお
浅間 和夫

117. 静かなる男

(原題:The Quiet Man)

1952年、アメリカ映画。監督：ジョン・フォード。この監督にジョン・ウェインが主演であるが御期待の西部劇ではない。監督が両親と自分の心の故郷アイルランドを舞台に、土地に愛着をもつアイルランド人気質をユーモラスに描いたものである。これには原作があるが、登場人物の名前はほとんど変えている。原作者のモーリス・ウォルシュはアイルランド農家の生まれの同国の代表作家のひとりであり、小説は同国東の大都市ダブリンで書いていた。この映画は、監督が初めて海外ロケしたものであるが、場所はモーム・クロスやコニマラの海岸などであり、石の多いところや泥炭も見られる。室内の撮影はアメリカに帰ってからセットでやったという。

映画は、無口なショーン（ジョン・ウェイン）が一旗あげてアイルランドの村に帰ってきたところから始まる。その日、ダナハー家の羊を追う赤毛で勝気な美女メリー・ケート（モーリン・オハラ）を見て一目惚れする。

彼女の家の夕食では、茹た大きめのジャガイモを配る風景が出てくる。故郷のこの村はダブリンの近くである（その昔ジャガイモに頼っていたこの地方で、19世紀半

ばにジャガイモ疫病というカビが原因の病気が大発生し、これを防ぐボルドー液などがまだ知られていなかったため、飢餓に見舞われ、ケネディやレーガン*大統領の曾祖父たちが村を離れ、アメリカへと渡ったことでも知られている。そんな土地のため、今でもジャガイモの消費が多い）。

結婚に反対する彼女の兄のもとに、マッチ・メイカーと一緒に挨拶に参上した日の夕食にも、私の期待を裏切らないでジャガイモとミルクが出ていた。そして、結婚した翌日も彼女は「バラより、キャベツやジャガイモを植えたら」と食べ物の大切さを言う（写真）。まさにアイルランドが舞台らしい、ジャガイモ好きを喜ばせてくれる映画であった。



写真1 ジョン・ウェインとモーリン・オハラ

監督とこの二人の組み合わせとしては、西部劇の『幌馬車』、『黄色いリボン』、『ア

パッチ砦』が有名である。モーリン・オハラは2015年10月24日アイダホ州ボイジの自宅で亡くなった。95歳であった。最後は家族と一緒にこの映画『静かなる男』の音楽を聴きながら息を引き取ったという。今日でも重要な植物防疫に絡んだ映画『怒りの葡萄』も同じ監督による。彼は様々なジャンルの映画を撮ったが、どれにも『男の生きざま、特に組織ないし社会に対する男』というテーマを貫ぬいていた。

*レーガン:俳優時代はリーガンと発音していたが、大統領候補になってから、アイルランド語のレーガンとした。両大統領は曾祖父の故郷ダブリンを訪ねている。

118. アラン (原題:Man of Aran)

1934年、イギリス映画。監督:ロバート・フラハティ。

記録映画の父と呼ばれる監督の代表作。奥さんのフランシスも一緒に島に行き『ある映画作家の旅』という本を著している。映画では、アイルランドの西側の孤島、アラン島に1年半のロケをして、厳しい自然と闘う家族(父親タイガーキング(コールマン・キング)、母親マギー(マギー・デイレーン)、子供マイケル)と絡む話を大別して「ワカメ」、「ジャガイモ」、「サメ」にわけて描いている。

島は石灰石の岩からできており、四季を通じて風が強い。そこで主食のジャガイモを収穫するには土が必要である。それには、男が岩石をハンマーで砕き、女が岩と岩の小さな隙間にある土を拾い集めてきて薄く敷いたり、重いワカメなどの海藻を籠に入れて担いできて土を被せて窒素肥料にしなければならない。ジャガイモは荒地でも育

てられると言われるが、これほど厳しい話は聞いたことがない。



写真2 割れ目から土砂を集める

波のシーンが多く、岩石砕き、ワカメ拾い、土集めの苦労は伝わるが、その後ジャガイモを食べるシーンは見られなかったのは残念。サメはタンパク質としてよりも、その油が冬の暖房に必要だった。ベネチア映画祭最優秀外国映画賞受賞作品である。

119. オデッセイ

(邦題:ODYSSEY、原題:The Martian)

2015年、アメリカ映画。監督:リドリースコット。

主演は『ボーン』シリーズなどのマット・デイモン(声:神奈延年)。アンディ・ウィアーの小説『火星の人』(2011年)が原作。火星に一人置き去りにされた宇宙飛行士の生存をかけた孤独な奮闘と、彼を救いだそうとする周囲の努力を描くサイエンス・フィクション・アドベンチャー。

主人公は植物学者で発展途上国の農業支援に従事したこともある、かつて宇宙飛行士でもあったマーク・ワトニー(マット・デイモン)。火星への有人探査計画であるアレス3に、クルーとして参加する。火星での探査任務中、大砂嵐に襲われたマーク

らクルーは、全ミッションを放棄して火星からの退避を決めてロケットへ向かうが、その最中にマークの腹部を折れたアンテナが直撃する。クルーたちはマークが死んだと判断して火星上の軌道へ戻り、さらに地球上の軌道へ帰還するためのヘルメス号に乗って出発してしまう。ところが、マークは生存しており、火星に一人取り残されてしまったことを知り、残されたわずかな物資を使って生き延びようとする。しかし、地球から救助隊がすぐに来る見込みはない。

マークは次のミッションであるアレス4が到着するまでの4年間を生き延びようとする。残留保存されていた資材を材料に水、空気、電気を確保すると、さらに火星の土とクルーの便をも活用し、感謝祭用に保存していたジャガイモを種いもとしてその栽培に挑む。水はハウスの外に水滴がつく装置を工作する。肥料分と土に微生物が必要なため、鼻をつまみながら仲間の残したウンチを活用して完璧な完全有機・無農薬栽培に挑戦する。ようやく顔を出したジャガイモの芽を確認してすごく喜び、“Hello there!”と呼びかける。



写真3 火星でジャガイモ栽培

マークはマーズ・パスファインダーを見つけ、その通信機能を回復させて地球との通話に成功する。NASAでは、まずマークのために追加の食料などを送ることを決めて急遽輸送用のロケットを打ち上げるものの、発射時に失敗してしまう。救助のための輸送を中国のロケットが引き受け、軌道に乗せることに成功する。

マーク生存の報を聞いた地球帰還中のアレス3のクルーが乗るヘルメス号はNASAの指令に反し、火星へ戻る。マークは、ヘルメス号が火星上の軌道に乗る日に合わせてローバーを改造して長距離走破を決行すると、火星の重力を振り切る唯一の手段となるアレス4用にすでに送り込まれていたMAV (Mars Ascent Vehicle) に乗り込む。そのMAVはヘルメス号からの遠隔操作によって打ち上げられるが、軽量化による覆いが打ち上げ途中に剥離し、それに伴う空気抵抗でヘルメス号から大きく離れることになる。ヘルメス号のクルーはこの距離を縮めるべく船内の空気を宇宙空間に放出することでエアブレーキを実行し、宇宙空間を漂っていたマークを確保し、地球へと向かう。これでようやく観客は安堵する。400日ほどで地球に帰還できるのだから。